

主の約束を信じて、 主イエスよ来てください

ヨハネ黙示録22章12～20節

2022年12月11日

松田 基子 師

聖書は創造主である神様による、天地創造からその終末までが記されています。そこで、とても大切なことは、その神様は**愛なるお方だ**と言う事です。愛は他者を求め、他者との交わりによって愛を生みだし、愛は広がって行きます。神様は、その愛を生みだし、成長させ広げていく存在として、人間を創造されました。神様はその人間のためにどれほど愛を注ぎ、心を尽くし、労されたのか、**聖書はその歴史を記して、神様の愛を何とかして、人間に伝えよう**としています。

神様が如何に人間を愛してくださったか、それは人間が何一つ不自由無く、互いに愛し合い、愛を築き合えるように人間が生きるために、完璧な世界を創造し、そこに人間を置いて下さいました。それが如何に素晴らしい世界であったかが、創世記2章8節から記されています。

「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらずあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた」

とあります。

エデンの園はパラダイス(楽園)でした。神様は人間を愛しておられました。愛は自発性です。信頼です。神様はその表明として、人間に自由意志をお与えになりました。人間はその価値の尊さを何にもまして知り、神様に絶対的な信頼を置いて従うところに、人間の愛の成長があり、神様にとって、有用な者になる事が出来る筈でした。ところが人類の代表として描かれているアダムの妻エバは誘惑者に唆される儘に、神様の言葉を疑い、誘惑者の言葉に従いました。アダムも妻に従い、二人共に神様の命令に背き

ました。その行為は、神様を信頼せず、神様の愛に叛いたことの表れでした。

ところで、自由意志が与えられたと言うことは、神様が人間を尊ばれた結果でしたが、それは自分のしたことに、責任が問われる存在に造られた事を意味しました。神様は御自身の言葉を疑い、誘惑者を信じた二人に、責任を負うことを教えるために、楽園を追放し、顔に汗を流してパンを得る人生、労苦と嘆きとの人生を送り、死に至る道を歩ませられました。神様は、そのことを事前に教えておられました。それを知らず二人は神様の命令を破ったのです。

そして、3章24節で、

「命の木に至る道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと、きらめく剣の炎を置かれました。」

神様は御自身と人間との間に入って、人間を誘惑したサタンに対して、創世記3章15節で、

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前はかれの踵を砕く」

と言い渡されました。

では、人間をサタンの誘惑と支配から取り戻すために、サタンの頭を砕く存在はいるのでしょうか。それは誰でしょうか。聖書は人類の歴史をそこに焦点を当て、人類の救いに至る永い歴史を綴っています。人は責任ある存在に造られながら、誰一人として自分の罪の責任を負う力はありません。人は皆罪を犯します。罪を犯さない人間は一人もいません。その罪の責任が負えない人間は皆、サタンと運命を共にする以外にありませんでした。しかし、神様は、人間の創造主として、人間を愛し、憐れみ、人間をサタンに引き渡してしまう事はお出来になりませんでした。サタンの頭を砕く存在として、サタンに勝る力と権威を持っておられるのは 神の御子だけです。神様は御子を人類の罪の贖いのために、人の世に、人の子として、送られました。それがイエス・キリストです。

サタンはイエス・キリストが神の子、人類の真

の救い主である事を誰よりも良く知っていました。サタンはイエス様を十字架に、徹底的に苦しめました。イエス様はその苦しみを耐え忍ばれ、人間自身では責任を取れない罪を、完全に贖って下さいました。神様はその贖いを受け入れ、イエス様を十字架の死から3日目に復活させられました。

『復活。それはサタンへの勝利。

死への勝利の証明』

でした。創世記に於いて誘惑者サタンが、人類に罪を持ち込み、人類の歴史を苦悩と死に至らせた事に対して、神様が、

「**彼はお前の頭を砕き、お前は彼の踵を砕く**」

と言われた、その預言はここに成就しました。イエス様こそ、サタンも、死をも打ち破られた神の御子、全被造物の創造者である、神様に等しいお方です。イエス様は復活し、人類への救いの道を開かれると、神様の権威執行者として、永遠の世界に帰られ、神様の右の座に着かれました。

しかし、そこで直ぐにサタンが滅ぼされた訳ではありませんでした。イエス様は御自身によって開かれた、神様からの罪の赦しと救いの福音を、御自身を愛し、信じる教会に託されました。教会は聖霊の助けによって、イエス・キリストによる永遠の救いの福音を、サタンに誘惑されたこの世の人々から、攻撃、迫害を受けながらも、全世界に向かって宣べ伝えて行きました。一方、神様はこの世界を終結されるべき時を定めておられました。時間で始まった世界は、有限ですから、必ず終わりが来ます。その終わりが来る事を神様からの黙示を受けて記したのが、ヨハネの黙示録です。

そこにはどの様な終わりが来るのかが記されています。

「**終わりが来る**」

と言うと、全てが破壊され、無になることなのだろうか心配になるのですが、そうではありません。私達は神様が愛であると言う事をいつも忘れてはなりません。神様こそ責任を全うされるお方です。人間は罪に罪を重ねて来ましたが、

神様は、独り子までお与えになって、人類を助け続け、世界を守り続けて来て下さいました。神様の御心は、ペトロⅡの手紙3章9節に記されていますように、

「**一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです**」

とある通りです。

しかし、神様はまた、正しいお方です。真実を込めて、イエス・キリストの福音が語られても、信じない人を無理矢理に信じさせることは出来ません。信じることこそ、自発性だからです。最後まで信じない者は、**サタンと運命を共にする以外にありません**。そのため、神様は世界を正しく精算する時を定めておられます。

しかし、それは破壊ではなく、全く質を異にする世界、新しい世界の出現なのです。創造主である神様は、ヨハネ黙示録21章5節で、

「**見よ、わたしは万物を新しくする**」

と宣言されました。それはサタンに属する罪と悪が全て滅ぼされ、神様の愛を疑わず、**イエス・キリストの御救いを信じ続けたキリスト者達を、国民とする、それも、時間の制約が取り除かれた、永遠の神の国が替わって出現する**のです。そこにはあの、**楽園の回復**があります。

黙示録の22章1節に、

「**天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に12回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を癒す。もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている**」

とあります。ここには、あのエデンの園にあった命の木が、人間の罪の為にケルビムと煌めく剣の炎で、塞がれていたものが、取り除かれ、命の主であるイエス・キリストの許から、永遠の命の水が川となって流れ、その水を自由に受けることが

できるようになる事が記されています。そこに居る人々は、

「額に、神の名が記されている」

とあります。それはイエス・キリストの愛を信じ、全信頼し、従い続けたキリスト者に、神様が付けてくださった聖霊による徴です。

5節には、

「もはや、夜はなく、ともし火の光も太陽の光も要らない。神である主が僕たちを照らし、彼らは世々限りなく統治するからである」

とあります。イエス・キリストの栄光が、如何に大きなものであるかを精一杯に表現しています。神様はヨハネに来るべき神の国の素晴らしさを見せて下さると、6節に、

「天使はわたしにこう言った。

『これらの言葉は、信頼でき、また真実である。預言者たちの靈感の神、主が、その天使を送って、すぐにも起こるはずのことを、御自分の僕たちに示されたのである』

とあります。

神様が言われる事を信じるのか、人間の言葉を信じるのか、それはあの、人間の祖以来、神様がずっと人間に問い掛け続けて来られた事です。

『イエス・キリストの言葉を信じるのか』が問われています。イエス・キリストは7節で、

「見よ、わたしはすぐに来る。この書物の預言の言葉を守る者は、幸いである」

と言っておられます。しかし、

『イエス・キリストの再臨は、二千年この方、起こっていないではないか。そんな事は信じられない』

と、この世の人々ばかりでなく、教会の中にも、信じ切れない人も居ます。

ペトロは

「主の日は盗人のようにやってきます」

と警告しています。私達の人生は短く、一息の間に過ぎて行きます。人は誰もイエス様の前に立たなければなりません。ですから、私達にとって、

『イエス様は直ぐにおいでになる。

お迎えするのに相応しい信仰と
生き方は、いつも今日なのです。』

天使は10節に、

「この書物の預言の言葉を、秘密にしておいてはいけない。時が迫っているからである」と言っています。神様の御心は、一人でも多くの人が救われて、神の国が一杯になることです。神様の願いは、全ての人々が救われることです。その為にイエス・キリストによる唯一の救いを宣べ伝えなければなりません。福音は教会に託されました。私達は力を合わせて、イエス・キリストを世に証しして行く責任があります。しかし、そこでの結果は問われていません。

天使はヨハネに11節で、

「不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ」

と言っています。イエス・キリストに従うか、従わないかで生き方そのものが変わってきます。それは、人間は決してそれ自身では生きていないからです。キリストに結ばれて生きるのか、サタンに結ばれて生きるのか、のどちらかしかないので。そして、その結果は、その人の生活に現れてくることは必然なのです。それでも、神様は悔い改めの時を待っていてくださいますが、それは、

『何時までも』

ではありません。

12節にイエス様は

「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる」

と言われています。14節には、

「命の木に対する権利を与えられ、門を通過して都に入れるように、自分の衣を洗い清める者は幸いである」

とあります。命の木の実を食べ、永遠の命に生きるためには、新しいエルサレムの門を潜らなければなりません。しかし、そこは神様がおられる所ですから、汚れの全くないところです。清い衣が必要です。清い衣はイエス・キリスト

の十字架の血に依って、罪を洗い清められ続けている人です。イエス様を愛し続け、信じ続け、従い続けることです。

15節には、

「**犬のような者、**(当時犬は不潔な動物とされ、疎まれていました) **魔術を使う者、淫らなことをする者、人を殺す者、偶像を拝む者、全て偽りを好み、また行う者は都の外にいる**」

とあります。人間の愚かさは、その現実直面しなければ分からない心の頑なさです。イエス・キリストを信じることの尊さが、その日にならなければ分からない。しかし、それでは遅いのです。イエス様は、

「わたしは、**ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である**」

と言っておられます。ひこばえとは、刈り入れの後、切り株から生え出た芽のことですが、神様はダビデに、永久の王座を約束され、その人物がメシアであるとされてきました。

ここで、イエス様御自身がメシアであることを宣言しておられます。明けの明星が輝くのは、

『**朝が直ぐに来る**』

ことの徴(しるし)です。イエス様は、神様の約束の真のメシアであり、新しい神様の御国が確実にもたらされる事を宣言しておられます。そのイエス様は、まだ、最後まで招いて下さっています。

「**渴いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むが良い**」

とされています。イエス様は永遠の命に至る水を、イエス様を信じ求める者に、何の条件も付けないで、惜しみなく下さるのです。

私達の側は、そのイエス様の愛に、全信賴して、心から素直にそれを戴くのです。人生を振り返れば、神様の愛を疑い、人間的な考えで生きて来たその様な者を、イエス様は尚も招いて、命の水を与えて下さるのです。これ以上の愛があるでしょうか。最早何ものも畏れる必要はありません。イエス様が、

「**然り、わたしはすぐに来る**」

と言って下さっています。

「**アーメン。主イエスよ、来て下さい**」

と心から告白致しましょう。

ところで、ヨハネの黙示録には、その幻や、表徴(ひょうちょう)、シンボル表現、数字などが記されています。著者は迫害下に置かれている状況の中で、その様な表現をしています。ですから、字句通り受け取ったり、今日の状況から、終末を読み取ろうとしてはいけません。その為、過去には再臨信仰の加熱や、再臨日の予測などの間違いがありました。イエス様はマルコ福音書13章32節で、

「**その日、その時は、誰も知らない。天使たちも知らない。父だけがご存知である。気をつけて、目を覚ましていなさい**」

と言われました。ただ、信じるべきことは、

『**イエス様は必ず再臨され、万物は新たにされることです。私達はその日に向かって、イエス様にお会いすることを思い描いて、ただ一途に、イエス様を信じ、慕い、愛し、従って行くこと**』

そのことに尽きるのです。

人間の祖は、神様の言葉を疑ったことで、神様の愛を裏切り、罪をおかしました。私達は決してイエス様の言葉を疑うことなく、主の再臨を信じ、備えて、主の愛に答えて参りましょう。

お祈りを致します。

愛と憐れみに富み給う天の父なる神様

あなたの愛は大きく計り難くその愛によって、私達をイエス・キリストの御救いに与らせてくださり、有難うございます。

その御愛に應えて、一途にイエス・キリストを信じ、愛し、従う者とならせて下さい。

新しいエルサレムの門を潜り、全ての聖徒と共に、御名を讃える恵みに与らせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈り致します。

アーメン。